

An aerial photograph of Shimotsuke city, Japan, showing a dense urban landscape with various buildings, including residential houses and commercial structures, under a clear blue sky. The city extends to the horizon with some distant hills visible.

下野新聞

since 1878

SHIMOTSUKE SHIMBUN

Company Profile



下野新聞社 代表取締役社長

若菜 英晴

WAKANA Eisei

下野新聞は1878(明治11)年の第一次「栃木新聞」創刊以来今日まで、栃木県に根ざした報道機関として歩み続けています。占有率5割を超える販売網を基盤に、県内17総支局を含め約80人の記者が栃木の今と人々の息遣いを伝え、アイデアあふれる企画広告や「下野新聞模擬テスト」などの伝統ある教育文化事業を展開しています。また、電子版やニュースサイト「下野新聞 SOON」をはじめとするデジタルへの取り組みを一段と強化し、デジタル時代の新たな新聞社像に向けた挑戦も続けています。2023年に創刊145年を迎える、この歴史ある下野新聞をさらに発展させ、スローガンである「郷土とともに明日をひらく」ため、豊かな感性と発想、そして志を持った方々に、ぜひとも仲間に加わってほしいと思います。

企業理念

地域貢献

わたしたちは、県民にとってなくてはならない新聞社を目指し、県民の幸せと愛する郷土の発展に貢献します

生活者新聞

わたしたちは、県民の生活向上を判断基準に、日本一分かりやすく役に立つ郷土紙をつくります

最強情報企業

わたしたちは、県内最強の取材網を駆使して、下野新聞を基軸に、価値ある情報を各種媒体に発信します

信頼

わたしたちは、長年にわたって培ってきた県民との絆を財産とし、最も信頼されるメディアであり続けます

挑戦

わたしたちは、常にチャレンジ精神を持って、変革の歩みを止めず、県民のニーズにこたえます

スローガン 郷土とともに ^{あす} 明日をひらく

行動指針 自律、熟考、挑戦



下野新聞社キャラクター
どっとこちゃん



シンボルマーク



社旗

年表 Shimotsuke Chronology

1878	明治11年6月1日	下野新聞の前身、第1次「栃木新聞」が栃木で創刊	9・7	本社新館完成
	12・8・2	第2次「栃木新聞」が栃木で創刊	9・11・16	「おーぼっく」を創刊
	14・6・8	「下野旭新聞」創刊	10・4	発行部数30万部を突破
	15・1・30	「足利新報」創刊	11・4・1	とちぎテレビへ本社スタジオからニュース中継開始
	15・9・8	第2次「栃木新聞」と「足利新報」が合併し、第3次「栃木新聞」が栃木で創刊	11・5・11	創刊115周年、発行部数30万部突破「感謝の集い」
	17・3・7	第3次「栃木新聞」が「下野旭新聞」を合併し、題字を「下野新聞」に改める。隔日刊、タブロイド4分、発行所、下野国河内郡宇都宮町池上町45番地、旭香社	11・5・12	下野新聞編集綱領を制定
	22・4・1	日刊で現在とほぼ同じ大きさの新聞4分になる	11・6	コンピューターによる新聞組版システムに移行開始
	26・11・22	星亨衆議院議長を批判したため1週間の発行停止を受ける	11・10・15-16	第52回日本新聞大会を招致、開催
	27・1・1	宇都宮町池上町51番地に洋風2階建て社屋を建設、移転	12・5	紙齢4万号記念式典
	27・8	日清戦争に特派員を派遣	12・11	全編集紙面がコンピューター組版システムに移行完了
	35・9・1	下野新聞株式会社に組織変更。資本金4万円	13・1・1	データベースへの記事、写真データの蓄積開始
	38・10・5	日露戦争講和条約に反対し4日間の発行停止を受ける	13・3・7	文字拡大で「しもつけ新L字」採用
	40・11・10	輪転機導入	13・4・1	「下野新聞」の題字を変更
	42・4・10	足利町で「両野新報」発行	15・4・4	下野新聞ホームページをリニューアル、愛称は「SOON」
1920	大正5年10月30日	紙齢1万号を迎える	15・4・4	しもつけ21フォーラム設立
	9・8・15	日光—宇都宮マラソン大会開催。県陸上競技会に大反響を呼ぶ	15・10・1	「ASTRO(アストロ)」「おーぼっく」を統合、生活情報紙「Aspo(アスポ)」を創刊
	11・5・28	鉄筋コンクリート3階建ての新社屋完成。北関東で初の本格建築として県民の注目を集める	16・1・1	「下野新聞」の題字を変更、カラーとなる
	12・9・1	関東大震災で東京各紙発行不能のため、7日まで下野新聞を東京に送る	16・3・7	下野ふるさと大賞創設
	13・7・1	夕刊を発行	16・6・1	創刊120周年記念式典開催
	16・12・15	紙齢1万5,000号を迎える	18・4・10	(株)下野新聞印刷センター創業
1930	昭和3年7月6日	第1回「下野美術展」を主催。部門は日本画と洋画	18・6・1	創刊日を明治17年3月7日から前身の第1次「栃木新聞」が創刊された同11年6月1日に変更。創刊128年、紙齢43,019号となる
	6・4・1	創刊50周年を記念し「半世紀の下野」を長期連載	19・6・1	「どっとこちゃん」が下野新聞社のキャラクターに就任
	8・3・17	東京日日新聞と友好関係を成立。紙面を全面的に改革、業務関係を刷新	19・9・10	ホームページ「SOON」で電子号外を初めて発行
	16・10・31	1県1紙の国策によって栃木県の代表紙となり、4社を合併	20・3・31	新組版システム全面稼働
	19・3・31	紙齢2万号を迎える	20a・4・1	文字拡大で「下野O(オー)文字」(1行10字)採用
	20・4・1	新聞非常措置令により、毎日、朝日、読売の持分21万部を全県下に供給	20・6・1	創刊130周年を記念し、新たな社旗やシンボルマーク、
	20・7・12	戦災により発行不能となる。毎日新聞に委託、発行を続ける	20・6・3	創刊130周年記念式典開催
	20・10・15	自力で発行を再開	22・10・1	紙面のQRコードから詳細情報を閲覧できる「+S」(プラス・エス)を開始
	33・3・23	紙齢2万5,000号を迎え記念式典。記念事業として下野奨学会、県農業コンクールを新設	23・12・29	紙齢4万5,000号を迎える
	42・2・8	資本金4,800万円に増資、現在に至る	24・4・1	宇都宮まちなか支局を宇都宮市のオリオン通りに開設、
	45・4・1	栃木県政経懇話会を設立	24・4・26	宇都宮市中心市街地版「みやもっと」を創設
1972	47・4・22	紙齢3万号記念式典。記念事業として下野県民賞を制定	24・4・26	長期連載「あなたの隣に 発達障害と向き合う」が
	49・5・1	宇都宮市昭和1-8-11に新工場が完成。輪転機4台を新設	24・6・1	科学ジャーナリスト賞の大賞を受賞
	51・5・24	輪転機2台を増設、24分の印刷体制が整う	24・10・23	「下野新聞NEWS CAFE」を宇都宮市のオリオン通りに開設
	52・11・15	鉛活字を使わぬコールドタイプへ、新聞製作の近代化完成	24・10・23	長期連載「終章を生きる 2025年超高齢社会」が第1回
	52・12	発行部数20万部	25・6・1	日本医学ジャーナリスト協会賞・大賞を受賞
	54・5・7	宇都宮市昭和1-8-11に新社屋完成。	25・6・1	創刊135周年を記念し、
	54・7・11	鉄筋5階建て6,393平方メートル	25・6・4	下野新聞KIZUNAスポーツ大賞を創設
	59・3・7	オフセット輪転機によるカラー印刷開始	25・6・4	創刊135周年記念講演・感謝の集い開催
	61・1・4	創刊100周年を迎える	25・10・16	「下野新聞NEWS CAFE」で2013年度新聞協会賞(経営・業務部門)を受賞
	61・5・22	紙齢3万5,000号を数える	26・3・1	紙面を従来の15段組みから、12段組みへ紙面刷新。文字も拡大
	62・3・14	下野新聞文化福祉事業団を設立(平成16年3月31日解散)	26・10・9	長期連載「希望って何ですか 貧困の中の子ども」が
	63・4	下野文学大賞を創設	27・12	石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞の
	63・4	発行部数25万部突破	29・6・1	「草の根民主主義部門」大賞を受賞
	平成3年7月	宇都宮市内の電光板に下野新聞提供ニュースを流す	26・10・20	「宇都宮餃子消費量日本一奪還プロジェクト」で
	3・9・23	中国浙江日報社と友好関係樹立	27・12	日本新聞協会新聞広告賞(新聞社企画部門)を受賞
	3・12	新輪転機3セット完成	29・6・1	長期連載「とちぎ戦後70年」が平和・協同ジャーナリスト
	4・2・13	全紙面文字拡大(1行12字)	30・6・1	基金賞の奨励賞を受賞
	5・8・31	(株)下野新聞アドセンター設立	30・6・1	「下野新聞電子版」創刊
	8・3	輪転機フルカラー8個面増設工事完成	30・7・20	創刊140周年を記念し、とちぎ次世代の力大賞創設
	8・5・5	「ASTRO(アストロ)」を創刊	30・9・16	下野写真協会設立
	8・7	新画像システム稼働	31・2・21	動画サイト「Movemate(ムーブメイト)」開設
1991	平成3年7月	宇都宮市内の電光板に下野新聞提供ニュースを流す	31・2・21	(株)栃木ダイレクトコミュニケーションズ設立
	3・9・23	中国浙江日報社と友好関係樹立	令和3.10.15	「認知症カフェプロジェクト」で日本新聞協会新聞広告賞
	3・12	新輪転機3セット完成	4・5・9	(新聞社企画・マーケティング部門)を受賞
	4・2・13	全紙面文字拡大(1行12字)	4・5・23	新「新聞制作システム」切り替え・稼働開始
	5・8・31	(株)下野新聞アドセンター設立	4・6・4	電子版夕刊の平日2回配信など、
	8・3	輪転機フルカラー8個面増設工事完成		デジタルでのニュース配信強化
	8・5・5	「ASTRO(アストロ)」を創刊		長期連載「なぜ君は病に…社会的処方 医師たちの挑戦」が
	8・7	新画像システム稼働		科学ジャーナリスト賞の優秀賞を受賞

下野新聞の実力

時代の変化見つめ145年

日本で初めて電燈(アーク灯)が灯ったとされる1878年(明治11年)。下野新聞の歴史はその年にさかのぼります。自由民権運動が世の中に広がっている中、前身である第1次「栃木新聞」が現在の栃木市で誕生しました。それから長い歴史を積み重ね、2023年6月1日で創刊145周年を迎えます。明治時代から大正・昭和・平成・令和と時代の変化を見つめながら、読者に新聞を届けてきました。下野新聞の前身時代を振り返りますと、後に足尾鋳毒事件で奮闘した田中正造(1841-1913年)らが1879年、自由民権運動を盛り上げようと、第2次「栃木新聞」を再興(再刊)しました。田中正造はこの「栃木新聞」で編集人を務めました。下野新聞の創刊135周年に当たる2013年は、田中正造の没後100年でもありました。1882年には、第2次「栃木新聞」と「足利新報」が合併し、第3次「栃木新聞」が誕生しました。この「栃木新聞」が1884年3月7日、県庁移転と同じように栃木から宇都宮に移り、宇都宮の「下野旭新聞」を合併、題字を「下野新聞」と改めました。このような歴史を経て、今日まで下野新聞の灯が輝き続けており、下野新聞は全国の地方紙の中でも歴史の古い新聞の一つです。

Shimotsuke History



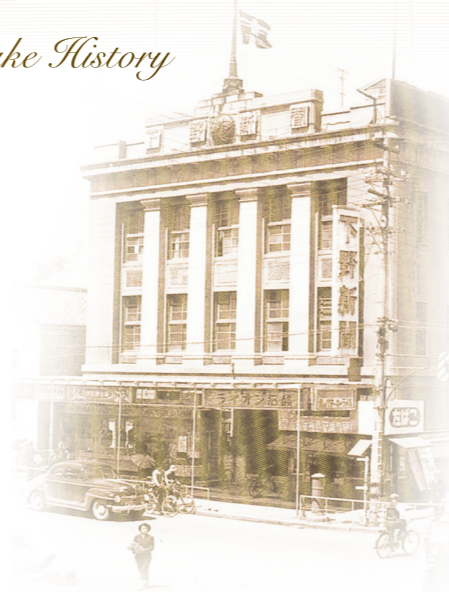
1878年(明治11年)6月1日付
第1次「栃木新聞」創刊号



1879年(明治12年)8月2日付
第2次「栃木新聞」創刊号

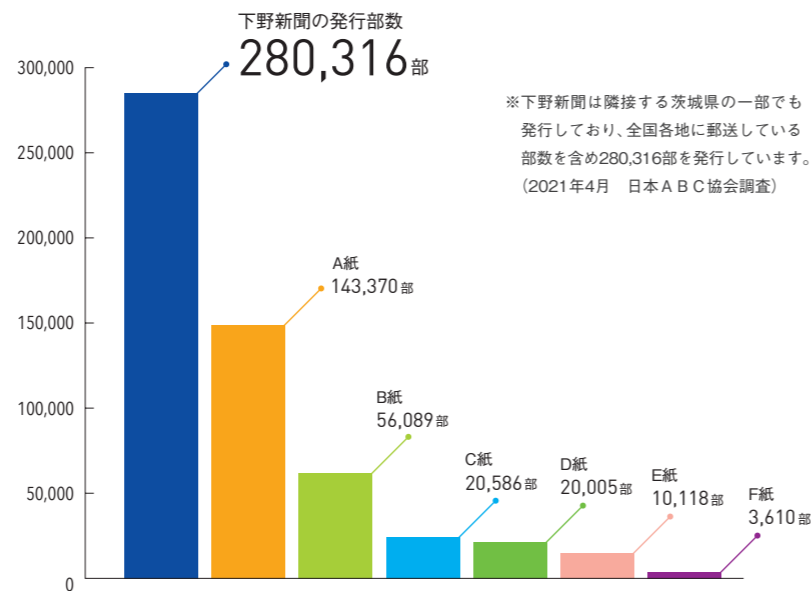


1884年(明治17年)3月7日付
「下野新聞」創刊号



栃木県内のシェア50%超 28万部発行

下野新聞の発行部数は2021年4月現在で、28万316部です。栃木県内の占有率(シェア)は52.5%に上ります。発行部数、占有率とも、県内の他の新聞を大きくリードしています。このことは、下野新聞が県内全域で、多くの県民に愛読され、読み継がれている証です。こうした中で、下野新聞社は2008年に制定した「郷土とともに 明日をひらく」というスローガンの下、より多くの県民に支持されるよう、新聞の使命を一層果たしていきます。



調査報道を行う長期連載企画

下野新聞の取材記者は事件、事故、政治や行政、スポーツ、生活の話題など、さまざまな現場を駆け回り、記者の目を見た栃木の「今」や、全国での出来事を栃木に置き換えた視点で県民読者に必要な情報を発信しています。近年は、一つのテーマをもとに取材班を作り、独自の調査報道を行う長期連載企画にも取り組んでいます。2019年から2021年にかけては、貧困や差別、社会的孤立など健康にさまざまな影響を及ぼす社会的要因に医療の立場から対応しようとする宇都宮市医師会の取り組みや問題の背景を描く「なぜ君は病に…社会的処方 医師たちの挑戦」を連載。2022年の科学ジャーナリスト賞優秀賞を受賞しました。他にも2014年の「希望って何ですか 貧困の中の子ども」が石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞の「草の根民主主義部門」大賞を受賞するなど、高い評価を得ています。

【近年の長期連載企画】

- 2019年
 - ◎なぜ君は病に… 社会的処方 医師たちの挑戦
 - ★科学ジャーナリスト賞2022優秀賞
 - ◎気候変動 とちぎ・適応への模索
- 2018年
 - ◎頑張れるんだ ～とちぎ・障害者スポーツの季節～
- 2017年
 - ◎彷徨う針 子宮頸がんワクチンの行方
- 2016年
 - ◎震災から5年 グラバーへの手紙 奥日光を愛した人に
- 2015年
 - ◎とちぎ戦後70年
 - ★第21回平和・協同ジャーナリスト基金賞奨励賞
 - ◎世界遺産 聖地日光
 - ◎希望って何ですか 貧困の中の子ども
 - ★第14回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞「草の根民主主義部門」大賞
- 2013年
 - ◎銀の靴を探して 2025年 交通とまちづくり
- 2012年
 - ◎終章を生きる 2025年超高齢社会
 - ★第1回日本医学ジャーナリスト協会賞 / 第31回 ファイザー-医学記事賞優秀賞
- 2011年
 - ◎あなたの隣に 発達障害と向き合う
 - ★科学ジャーナリスト賞2012大賞



「なぜ君は病に… 社会的処方 医師たちの挑戦」のエピソード



科学ジャーナリスト賞贈呈式の様子を伝える下野新聞記事

下野新聞 NEWS CAFE

下野新聞NEWS CAFEは2012年の創刊記念日に当たる6月1日、宇都宮市中心市街地のオリオン通りに開設しました。建物内には宇都宮市街地の取材拠点である「まちなか支局」があり、CAFEと連動して新鮮な地域情報を発信しています。全国の新聞社でも支局併設の常設店舗型ニュース・カフェの開設は初めてのことで、「新聞社が行う地域貢献のモデルを示した」として、下野新聞社は「下野新聞NEWS CAFEの開設とその取り組み」で、2013年度新聞協会賞(経営・業務部門)を受賞しました。新聞協会賞受賞は下野新聞社にとって初めてで、創刊135周年の節目の年に大きな荣誉に輝くことができました。2020年6月には「下野新聞NEWS CAFE 茶果 tea room」としてリニューアルオープン。フルーツサンドやフレイバーティーが人気です。



「下野新聞 NEWS CAFE 茶果 tea room」の外観



下野新聞 NEWS CAFEの店内カウンター



店内では一か月分の下野新聞が読める

充実した地域面

下野新聞の地域面は、「県北・日光」「県央・宇都宮」「県南・両毛」の3地域に分けて、県民・読者の身近な情報や話題をはじめ、連載企画などをふんだんに掲載しています。カラー面も多く、ビジュアル的に読みやすい紙面を心がけています。2012年からは宇都宮まちなか支局の開設に合わせて、宇都宮中心市街地の情報をタウン誌のような紙面構成で紹介した「みやもっ」と面を毎週日曜日に掲載しています。2018年6月からは、県内25市町それぞれの市町ごとに順番でスポットを当てる「個別市町版」を新設しました。



県内全域に取材拠点、宇都宮にはまちなか支局

下野新聞社は日々、地域に根差した紙面を作り続けています。取材活動の拠点としては6総局、その傘下の11支局の計17総支局を15市町に配置し、県内全域をきめ細かく網羅する取材体制を構築しています。地域別では、県北地域に6総支局10人、県央地域に7総支局15人、県南地域に4総支局10人を配置しています。2012年には、宇都宮中心市街地の取材活動の拠点となる「宇都宮まちなか支局」をオリオン通りのビルの中に開設しました。まちなか支局は毎週日曜日に掲載している中心市街地版「みやもっ」とを担当しています。本社には取材部門として政経部、社会部、運動部、くらし文化部、写真映像部があります。本社と総支局を合わせた記者の数は約80人に上り、県内取材網としてこの新聞社にも負けない体制を敷いています。各部署の記者は日夜、さまざまな分野で取材活動を展開。いち早く情報をキャッチし、読者にニュースを届ける努力を続けています。このほか、首都・東京にも報道部があり、国会や栃木県関係の中央での動きなどに関するニュースを伝えています。国内や海外のニュースは共同通信社から配信される記事を活用。下野新聞は単独紙として、国内外の出来事がよく分かる紙面を作り、読者に提供しています。



子育て世代を応援

2019年4月からは、県内の子育て世代を応援する「はぐくもっ」と面を土曜日に掲載しています。県内出身、ゆかりの著名人の親に子育てを振り返ってもらう「わたしの子育て」のほか、読者参加型の企画や子育てに役立つ情報などが盛りだくさんです。



スポーツ報道にも力

スポーツ面は各世代のアマチュアスポーツから、サッカーの栃木SC、バスケットボールの宇都宮ブレックスなど県内に拠点を置くプロスポーツまで、幅広く報道しています。特に学童野球、少年サッカー、高校野球などは読者の関心も高く、県内にとどまらず県外にも取材に向かいます。また2018年4月からは、県内の小学生世代に特化し試合結果や話題を集めた「小スポ」面を掲載しています。



とちぎ発にこだわる

地域発のニュースにとことんこだわり、県民の生活に役立つ有益な情報を提供します

正確な報道に徹する

正確で公平な報道に徹し、県民から信頼される地域ナンバーワンの新聞を目指します

編集方針

下野新聞は、栃木県内随一の取材網を生かし、地域密着にこだわりながら読者と「とちぎ」をつなぐ架け橋になります。県民の信頼を第一とし、県民に開かれ、県民の暮らしと命を守る新聞を目指します。

地域の安心を支える

県民の暮らしを脅かす不正や暴力、差別等に立ち向かい、地域社会の安全・安心を支えます

分かりやすく伝える

複雑化する社会を他メディアより分かりやすく伝え、子どもからお年寄りまで満足して読まれる紙面をつくりたい

読者とともに考える

県民の視線を大切に多様な価値観を尊重し、地域の人々とともに考える新聞を目指します



記者の仕事

くらし文化部

くらし文化部は生活、医療、教育、美術、芸能、文芸など人々の暮らしに関わる幅広い分野をカバーしている部署です。7人の記者が担当を分担しています。目指しているのは新聞のハードルを下げ、「新聞は取っ付きにくい」と思っている人に手に取って読んでもらうこと。読者の生活に根ざした関心事を柔らかく、分かりやすく伝えることを心掛けています。私生活では子ども2人を育てています。小学生になってからは習い事の送迎が増えたり、勉強を見たりと忙しくなりましたが、会社独自の短時間勤務制度などを利用して両立しています。自分の子育ての経験が取材に生きることはもちろん、逆に取材で聞いた話が子育てのヒントになることもあり、充実した日々を送っています。



外山 雅子 TOYAMA Masako

宇都宮まちなか支局

毎週日曜日掲載の「みやもっ」と面を主に担当しています。この仕事の特徴は裁量が非常に大きいことです。特に看板コーナーの「はっしん! まちなか記者」は企画立案から取材方法の検討、原稿化までの全てを任されています。街なかの魅力や現状を伝えるためならテーマも方法も自由です。ボランティアに参加したり、ごみ拾いをしたり、時には激辛料理を食べたり…。現場の温度感を伝えるためなら、記者自身が体当たりで挑戦することもいとません。店主の方たちと何気ない雑談が企画のヒントになることもあります。地域と深く関わる仕事なので、さまざまな委員会の委員を務めたり、コミュニティーFM「ミヤラジ」へ出演する機会もあります。これからも楽しく読めて役立つ情報をどんどん発信していきます。



近藤 圭佑 KONDO Keisuke



TASAKI Tomoaki 田崎 智亮

政経部県政担当

政経部県政担当は、暮らしに直結する行政や政治の話題を報道するのが主な仕事です。栃木県庁に入る記者クラブを拠点とし、県庁の各部局や県議会を日々取材しています。新型コロナウイルス報道をメインで担当しているのも県政担当です。刻々と変わる感染状況や県の対策を分かりやすく、迅速に報じられるよう努めています。政治取材も醍醐味の一つです。政治では人間関係や個人の影響力などがものをいいます。政治家との距離を詰めて考えを聞き出したり、言動に注意を払ったりしています。一方で政治や行政の不正をチェックするのも新聞社の役割です。SNSが浸透し、地方発のニュースが全国に届きやすくなりました。読者の期待に応えるため、栃木の今を全国に知ってもらうため、仲間と日々切磋琢磨しています。



ISHITSUKA Machi 石塚 万知

写真映像部

“誰かの心を動かす”1枚。写真映像部員は、そんな写真を紙面に掲載するべく日々奔走しています。取材は四季の風景や花々、スポーツや事件・事故の撮影など多岐にわたり、取材地も北から南まで幅広いです。部員の多くは学生時代にカメラや写真を専門に学んでいたわけではないので、初心者に近い状態からスタートします。重い機材を扱い、構図や撮影技術を学び、瞬間のシャッターチャンスを捉える力を培う毎日。経験と時には失敗も積み重ねて一人前になっていく、一朝一夕にはいかない仕事です。どんなに場数を踏んでも悩み、反省を繰り返し、撮り逃さない緊張感と共に現場に赴きます。プレッシャーと向き合い、思い通りの1枚に辿り着けた時の感情は言葉では言い表せません。

社会部県警担当

主な取材対象は、県民に関係する事件事故や裁判です。重大な事案が起れば、昼夜問わず現場に駆け付け、捜査関係者や事件関係者を訪ね歩きます。真夏に汗だくになりながら現場を走り回ることも、寒空の下で取材対象者を数時間待ち続けることもあり、決して楽な仕事ではありません。思うように情報が掴めないことも多く、精神的なタフさも要求されます。それでも次の一步を踏み出すのは、多くの県民が日々の生活の中では実感することがない事件事故の不条理や事案の真相を少しでも早く、深く伝えるためです。それが「次の被害者を生まないために何が出来るのか」を社会全体に問いかけることにつながる。そう信じて、今日も励んでいます。



富井 太啓 TOMII Takahiro

整理部

整理部の仕事は、主に現場の記者から送られた原稿や写真などを材料に、紙面を見やすくレイアウトする編集の役割を果たしています。その日のニュース(事件や事故など)の価値を判断するため、議論を重ね、重大性を格付けし、見出しの文言や写真の大きさなどを決めていきます。読者に正確かつ分かりやすいニュースを伝えるため、その名の通り、情報を適切に「整理」することが使命です。降版時間の制約とも戦いながら、日々の仕事に全力で取り組んでいます。ニュースは時間とともに絶えず情勢が変わり、その価値も変化していきます。ときに正解なき選択に苦悩し、それが正しかったか自問自答を繰り返すこともあります。苦難を乗り越え、洗練された紙面が完成したときの喜びは格別です。



渡辺 和博 WATANABE Kazuhiro

デジタル配信強化

「紙もデジタルも」目指す

下野新聞社はデジタルによるニュース配信を強化しています。記者が書いた記事は、まずは紙の新聞に出す—これが新聞社の常識でした。つまり、今日書いた記事は、どんなに早くも掲載されるのは明日の新聞でした。しかし、ほとんどの人がスマホを持つ時代に、それだけでは足りない。紙の新聞はもちろん大事にするけれど、栃木県民にとって大きなニュースが起きれば、自社ホームページSOONに速報記事を掲載するのももちろん、その記事をヤフーやLINEといった外部メディアやSNSを通して拡散することなども含め、より多くの人に下野新聞の記事を届けることを考えていく。つまり、「紙もデジタルも」というのが、デジタル配信を強化する基本的な考え方です。



SATOH Yuka

佐藤 友佳

デジタル報道部

インターネットで誰もが自由に情報発信できる今、ライバルは世界中にいます。私たちはプロとして、大切なニュースをより速く、正確に伝えなければなりません。一方で、親しみやすさを強く心がけています。ネット世代になじむようなわかりやすい見出しを考え、SNSでは“中の人”として読者と交流。「あなたが思うよりずっと、ニュースは面白くて、身近にある」と伝えたいのです。記事や投稿がどれくらい読まれたのか、数字で分かってしまう分、プレッシャーもあります。それさえも楽しみながら、ベストな言葉やタイミングを探る日々。広いネットの世界を相手に考え続けることは、終わりのない旅のようですが、自分のセンスも無限に磨かれていくと信じています。

ニュースをいち早く 下野新聞SOON

下野新聞 SOONは下野新聞社のデジタル事業の中核をなすニュースサイトです。1995年に誕生し、携帯電話向けやスマートフォン向けなど時代の変化に合わせて、その形態も進化してきました。事件事故や災害情報、スポーツの選挙結果、県内選挙の開票状況などの速報を中心に、速報性、動画、多彩な写真などデジタルならではの利便性を生かすとともに、下野新聞社でしか得られない地域の話も含め、栃木県内で「今、何が起きているか」をいち早くお知らせしています。ニュースの他にも、年間 8000万ページビュー(※1) という媒体力を生かし、デジタル独自のネイティブ広告や動画広告を通して、栃木県内のさまざまな情報のプロモーションを担っています。

※1：2021年度



スマホでいつでもどこでも 下野新聞電子版

スマートフォンでも地域ニュース満載の下野新聞を読んでほしい。そんな思いから2017年に、アプリで読める「下野新聞電子版」を創刊しました。下野新聞掲載のすべての記事を読めるのももちろん、ジャンル別で記事を探したり、過去30日分の記事を検索することもできます。2022年からは電子版だけの夕刊を強化し、栃木県内の速報を增量。全国の主要ニュースや、おくやみ情報もいち早く確認することができます。



下野新聞電子版

多メディア配信

下野新聞の記者が書いた記事を、栃木県内だけでなく全国のより多くの人に届けるため、多くのニュースプラットフォームにも配信しています。LINEニュースの友だちは40万人(※2)を超えており、国内最大のニュースサイトYAHOO! ニュースでも、下野新聞発のニュースが全国の注目を集めることもあります。検索大手Googleのニュースショーケースなどの新たなサービスにも順次対応しているほか、栃木県内のテレビ・ラジオなどのメディアにもニュースを配信しています。

※2 2022年7月現在

LINEニュースアワード 2年連続部門大賞

LINE社が1年間でユーザーに最も支持されたメディアに贈る「ニュースアワード2021」で、下野新聞は2年連続で「地方メディアII」部門の大賞に選ばれました。本県関連のニュースを見出しを工夫するなどして配信した結果、受賞メディアの中で「ユーザーアクティビティ」の上昇率(昨年比)が最も高かったことなどが評価されました。



LINEニュースアワード

無料通信アプリ大手のLINE(ライン)は9日、今年1年間でユーザーに最も支持されたメディアに贈る「NEWS AWARDS(ニュースアワード)2021」を発表した。下野新聞は2年連続で「地方メディアII」部門の大賞に選ばれた。ニュースアワードは、ライン公式アカウントを通じてニュースを配信している新聞社や出版社、ウェブメディアなど370以上の媒体を13部門に分け、読者の満足度を独自指標でランキング化した。

下野新聞が表彰された部門は34媒体が対象。本県関連のニュースを見出しを工夫するなどして配信した結果、受賞メディアの中でクリック率など能動的アクションを示す「ユーザーアクティビティ」の上昇率(昨年比)が最も高かったという。21年に下野新聞が配信した記事では、新型コロナウイルス感染症関連の閲覧数が上位を占めた。生活雑貨店「無印良品」の足利出店、会員制倉庫型量販店「コストコ」の壬生出店計画などもアクセス数が多かった。(石崎倫子)

デジタル局の仕事

デジタル局はデジタル戦略の構築などのために 2022年春に創設された新しい組織で、企画開発部とデジタルビジネス部があります。企画開発部は SOONや電子版などの運営管理や動画事業、システム開発、著作権・データベース事業などを推進。デジタルビジネス部はデジタル広告の企画・営業やデジタルマーケティング事業などを担っています。

【デジタル戦略】

今や新聞社にとってデジタル事業は必要不可欠な領域です。栃木県内のニュース・情報をいかに読者に広く届けるか、そして課金や広告などでマネタイズを図っていくか、最新の情報を収集しながら戦略を立て、失敗を重ねながらも挑戦を続けています。

【動画事業】

コンテンツ・プロモーションの両面で「動画」は重要となっています。デジタル局では受託事業の動画制作や、イベント等のライブ配信、動画を活用したデジタル広告など、企画から制作、プロモーションまでワンストップで展開しています。

【デジタル広告】

クライアントのデジタル広告への需要が高まる中で、下野新聞 SOON のディスプレイ広告、Twitter、LINE などの SNS 広告や動画広告などクライアントの要望に合わせ、最適なデジタル広告プランを提案。また消費者の広告へのアクセスを分析、検証することで広告効果を高めています。

【デジタルマーケティング】

デジタル商材を活用して、クライアントの課題解決に努めています。企画提案→実行→検証を繰り返すことで、クライアントの信頼関係を築き、日々進化するデジタル商材の知見を高めながら、クライアントの要望に応えています。

【スマートシティ】

デジタル化が進展する中、スマートシティ事業にも挑戦しています。宇都宮市ではサイネージや LINE を活用した実証実験を外部企業と連携して実施するなど、地域に根差した企業として地元事業者・自治体とデジタル技術をつなぐ役割を果たしています。

【著作権・データベース】

140年を超える新聞の歴史を次世代に残していくため、過去の紙面の保存やデータベース化を進めるとともに、新聞記事・写真を適正に活用してもらう事業を担っています。

デジタルビジネス部



KANNO Tatsuo

菅野 達央

デジタルビジネス部では下野新聞社ニュースサイトの SOON に掲載するデジタル広告の企画・立案をはじめ、LINE や Instagram、Twitter などの SNS、動画事業と、多岐にわたって仕事をしています。デジタルは常に進化を続け便利で万能と思われるがちですが、それを活用し判断するのはあくまで私たち「人」です。デジタルがはじき出すデータは数値という形で時に残酷にも事実として現れます。デジタルの発展に順応するべく、我々もまた常に成長を求められます。聞き慣れない言葉も多く頭を使いますが、ここでしかできない経験に面白みを感じられる素敵な職場です。地域に根差した新聞社だからこそ実現可能なデジタルサービスとは何かを常に模索し、実践できるよう試行錯誤を繰り返しています。

企画開発部

下野新聞社には、これまで約 145 年間にわたって培ってきた「信頼」や「情報」などのさまざまな資産があります。デジタル局は、そういった当社独自の資産をデジタル分野で発展させていくことが仕事です。記事や写真などの「情報資産」をデジタルビジネスに転換する仕事のほか、下野新聞社が保有する顧客データをもとにしたユーザビリティの強化や新規ビジネスの企画、デジタル技術を活用した企業の課題解決など、内容は多岐にわたります。日々変化するデジタルを取り巻く環境を理解し、自分の頭で考え、前例のない仕事にチャレンジしていく。デジタル局はそんな冒険好きな人たちの集団です。



中里 千尋

NAKAZATO Chihiro

企画開発部 Webエンジニア



廣田 朋之

HIROTA Tomoyuki

SOON や電子版アプリの保守開発や、受託案件のシステム開発を行っています。Web エンジニアはひたすらパソコンに向き合っているイメージがあるかもしれませんが、実際にはプログラミング能力だけでなく、クライアントが何をしたいのかを理解するコミュニケーション力や、利用時のことを具体的に考える想像力も必要となります。下野新聞社では、企画段階からプロジェクトに参画するため、自分のアイデアを提案・実現できます。デジタル分野は日々進化しており、常にトレンドをキャッチするとともに、自らのスキルアップも必要なため、大変な業務です。しかし、努力した分だけ仕事がうまくいく面白さがあり、何より自分が開発したシステムが世に出て多くの人に利用してもらえることに、とてもやりがいを感じています。

営業局の仕事



営業局の営業部は新聞広告を中心とした営業業務全般を担います。業務推進部は広告売上向上のための企画立案などを担います。ビジネス開発室は新規事業を創出するための調査研究などを手掛けます。コンテンツ推進部は委託イベント運営や出版など、営業管理部は広告の入稿管理や事務などを担います。東京、大阪にもそれぞれ支社を置いています。



MISHIMA Yoshinori

美島 義憲

コンテンツ推進部

コンテンツ推進部では地域プロモーションイベントやスポーツイベントの企画立案・運営業務、出版業務などを行っています。「とちぎ国体」といった県を挙げた事業や宇都宮市内で開かれる自転車の世界的大会「ジャパンカップサイクルロードレース」、県内プロスポーツチームの冠試合、都市町対抗駅伝など、県内のスポーツイベント運営に関わる業務を幅広く行います。様々な業務に追われますが、やり切った時の達成感は大きく、多くの経験を積むことができます。企画提案から当日運営までチームで行うことが多く、コミュニケーションを大切にしています。仕事でスポーツに関わりたいという思いもあり、他業種から40歳で転職しました。イベントを通じて栃木に元気を届けたいと日々業務に努めています。



FUNATSU Mii

船津 美衣

営業部

営業部は新聞広告の提案をメインとしていますが、他にもネット、ラジオ、テレビ、フリーペーパーなど様々な媒体を取り扱います。クライアントは行政や各種団体のほか、ホテルや小売店等といった民間企業など、業種や規模も多岐にわたり、求められるものも多種多様です。それに応えるため、日頃から知識や知見を広げることが必要だと感じています。2020年度に立ち上がった「認知症カフェプロジェクト」では、民間企業や行政、病院などへのセールスに中心となって取り組みました。全てがゼロからのスタートで多くの困難がありましたが、新聞広告分野の最高賞である日本新聞協会の新聞広告賞を受賞できました。自分の企画やアイデアで社会問題解決の一助となる仕事ができる、非常にやりがいのある職場です。

しもつけ21フォーラム

「しもつけ21フォーラム」は、栃木県の政治経済、文化の発展に資するために、著名な実業家や政治家、文化人らを招き、会員制の運営で実施しています。毎月の例会を通して混迷の時代を切り開くヒントを提供しています。発足は2003年4月。今後もタイムリーな講師による例会を重ね、栃木県の政治経済、文化の発展に寄与します。



出版

栃木の自然、歴史文化、スポーツ、グルメ、旅のガイドなど地域に根差した出版物を発刊しています。



「認知症カフェプロジェクト」

2025年には65歳以上の5人に1人が認知症という推計がある中、認知症への不安や恐怖、偏見をなくし、発症しても自分らしく生きる大切さを啓発しました。オレンジを中心に明るい色で新聞広告を展開したほか、紙面以外にも啓発イベントを開催、特設ホームページも展開しました。



★2021年度 日本新聞協会 新聞広告賞 (新聞社企画・マーケティング部門) 受賞



いのちにハグを。 キャンペーン

子どもへの虐待がない栃木県を目指し、賛同していただいた企業・団体とともに、新聞紙面を通じた呼びかけ、啓発イベントの実施など、児童虐待ゼロに向けた活動を推進しています。



販売事業局の仕事

販売事業局には販売部と教育文化事業部があります。販売部は新聞販売店との連絡調整や新聞販売の普及促進に関わる企画立案などを担います。教育文化事業部は文化・スポーツ事業の企画立案・実施やNIE(Newspaper In Education)をはじめとする教育支援業務などを手掛けています。



SEKIZAWA Kazumasa

関澤 一将

販売部

「目には見えない販売網をデザインする」。世界でもまれな戸別配達制度の一翼を担う仕事にやりがいを感じています。私たちは下野新聞を製作する「メーカー」で、「商品」は約120の販売店に委託し、販売・配達していただいています。主な業務は販売店の社長と配達体制や部数管理、県民向けPR策を打ち合わせ、実行すること。購読者や折り込みチラシの減少に伴う収益の悪化、人手不足など経営の相談にも乗ります。厳しいやりとりもありますが、販売店や読者のためと、心を鬼にしています。今、新型コロナウイルスの影響で正確な情報を求める県民の購読申し込みが増え、下野新聞の価値や意義を改めて感じています。情報過多の時代だからこそ感度を高くし、読者の要望に応えられる下野新聞の普及に努めたいですね。

販売

販売部は栃木県内の139新聞販売店(2021年10月現在)の協力のもと、県内の読者の皆様に毎日欠かさず新聞をお届けするため、各種の業務を行っています。下野新聞は鹿沼市にある印刷センターで印刷されていますが、同センターから各販売店への輸送の管理、各販売店が確実に配達できる体制のサポートなどに取り組んでいます。読者の皆様の最も近くにいる販売店を通して、寄せられる要望や注文などの情報を収集し、社内各部署にフィードバックする役割も担っています。また、活字離れが言われ、新聞に接する機会が少なくなっている中、教育文化事業部とも連携し、小中学生や保護者の皆様へのPRなど各種取り組みを展開。広く新聞の機能を知ってもらい、情報のツールとして活用してもらえるよう努めています。



小サポ、中サポクラブの「小サポ通信」「中サポ通信」と問題集

中サポと小サポ

下野新聞社は、高校進学を目指す中学生とその保護者向けに中学生サポートクラブ(中サポ)を運営しています。さまざまな教育・受験情報や教材などをお届けすることで受験を応援する会員制クラブで、下野新聞を購読していれば無料で入会できます。会員向けに毎月、質の高い問題集を発行しています。問題集には解答と解説が添付されており、好評を博しています。下野模試の解説動画も用意しています。また、中サポクラブの「きょうだい」として、2016年4月からは小学生4～6年生を対象とした小学生サポートクラブ(小サポ)も運営しています。問題集と解答・解説や情報紙のお届けのほか、下野新聞社の主催イベントへの優待、小学生スポーツ大会の試合結果速報配信など、さまざまなコンテンツを用意しています。



OHKI Yuna

大木 優奈

教育事業

下野新聞社は「下野新聞模擬テスト」をはじめ、新聞紙上での学習講座「中サポ学習室」「高校入試中サポ講座」の掲載など、教育関連の事業に力を入れてきました。「中学生サポートクラブ」「小学生サポートクラブ」は、小・中学生の学力づくりに寄与することを目的に、情報紙や問題集などの教材をお届けする会員制のサービスで、多くの小・中学生とその保護者の皆様に好評です。「しもつけ新聞塾」は、記者を学校や公民館などに派遣する出前講座です。読む力、考える力、表現する力を身につけてもらい、社会への関心の芽をはぐくむきっかけづくりとなっています。最近では新聞をビジネスに活用するNIBも、県内の企業様より多くのオファーを頂いています。このほか、「しもつけ新聞スクラップ作品コンクール」「新聞を読んで感想文コンクール」「下野教育美術展」「下野教育書道展」など教育的なコンクールも多く主催しています。

教育文化事業部

教育文化事業部は、主に「教育」と「文化・スポーツ」の2つのカテゴリーの事業を展開しています。教育関連では、60年以上続く下野新聞模擬テストは、高校受験の指標として広く県内で知られています。また2019年には我が社の主管により、宇都宮市でNIE(新聞活用教育)の全国大会が開催されました。今後も本県の教育界と連携し、新聞を通して子供たちの言語活動の充実に寄与していきたいと思っています。「文化・スポーツ」に関しましては、新聞社の特性を活かした様々なイベントを展開しています。読者の皆様に良質な文化的な催事や、レジャー、そして「学び」の場を提供することは、新聞社の大切な使命であると考えます。様々なイベントの場は読者の皆様と直接触れ合うことのできる貴重な機会でもあり、これからも大切にしていきたいと思っています。



主な主催事業

- 1月 県都市町対抗駅伝競走大会
県小学生駅伝競走大会
- 2月 下野杯争奪県下中学生サッカー大会
- 3月 下野教育美術展
とちぎあした天気になあれジュニアゴルフ大会
- 4月 県下有段者囲碁大会
ダブルスゴルフ選手権大会
- 5月 しもつけ写真大賞展
県シニアゴルフ・アマチュアゴルフ選手権大会
- 6月 大学・短期大学・専門学校進学相談会
中3生対象 下野新聞模擬テスト(6月、8月、10月、11月、12月、1月開催)
- 8月 県学童軟式野球大会
下野の書展
県ジュニアピアノコンクール
- 9月 県中学校優秀選手・県小学生優秀選手陸上競技大会
県高等学校進学フェア
- 10月 県知事盃争奪ゴルフ競技大会決勝
※ほか、「しもつけ新聞スクラップ作品コンクール」「新聞を読んで感想文コンクール」「小学生読書感想文コンクール」など。

購読・試読のご案内

☎0120-810081

(フリーダイヤル受付：平日午前10時～午後5時)

下野新聞の購読料は1か月税込3,350円です。試読ご希望の方には1週間無料でお届けします。購読・試読は左記フリーダイヤル、またはお近くの下野新聞取り扱い販売店までお申し込みください。パソコン・スマートフォンから、下野新聞のホームページ「S O O N」からもお申し込みになれます。

Uターン・Iターン

下野新聞社には多様な人材が働いています。「Uターン」は、栃木県出身で首都圏などでの社会人経験を経て入社した社員を、「Iターン」は県外出身者で現在活躍している社員を紹介します。一緒に下野新聞社で働いてみませんか？



社会人通年採用で記者に転身

—前職は何をしていましたか。

宇都宮市で生まれ育ち、市内の高校を卒業後、東京の大学に進学しました。大学卒業後に東京の海運会社に就職し、3年間働きました。退職してイギリスの大学院に1年間留学し、貧困や移民の問題などを研究しました。

—仁平さんは社会人通年採用制度による入社第一号です。

登録したきっかけは。

留学先で次の進路を考えていたとき、報道・メディアに興味を

あったこともあり、地元紙の下野新聞社の採用ホームページをチェックしていました。社会人通年採用制度が始まったので、帰国後の2020年1月に登録しました。

—社会人通年採用試験はどういう経過でしたか。

採用試験は作文と2回の面接でした。面接ではこれまでのキャリアも聞かれましたが、むしろ精神面、タフさというか、そういったところを見られていたように感じました。ハキハキとしていて丈夫そうなところは評価していただいたのかな、と思います。

—27歳で前職とはまったく違う新聞記者に転職し、取材する日々です。

前職では東南アジアに事業所があったので、人種や国籍が違う人たちともやりとりがありました。そんな中で、価値観を押し付けられないコミュニケーションを工夫した経験があります。その経験は取材にも生かしていると思います。



宇都宮の仲間とゴルフを楽しむ仁平記者（左から3番目）。栃木県は人口10万人あたりのゴルフ場の数が日本一



震災で人生観に変化 家族第一に

—前職は何をしていた？

矢板市で生まれ育ち、大学進学を機に東京に出ました。卒業後は東京の繊維専門商社で6年間働きました。

—Uターン転職に下野新聞社を選んだのはなぜ？

2011年の東日本大震災を機に、人生観が大きく変わりました。矢板も大きな被害に見舞われ、実家は停電や断水が何日も続きました。東京で過ごしていた私は、育ててくれた家族に何もできないことに虚しさを感じ、このままずっと東京にはまた同じ思

いをすると感じたので、栃木に戻る決心をしました。栃木県内の企業情報を調べていた矢先に、実家で下野新聞を読んだ母から「下野新聞社員の社会人採用試験の記事が載っている」と聞きました。下野新聞には小さいころからなじみがあり、改めてホームページを見て「地域に根差し、郷土の発展に貢献する」という企業理念に魅力を感じたため、応募を決めました。

—Uターン転職を考えている人にメッセージを

Uターン転職を考えている方は「家族」と「仕事」とどう向き合うかで悩んでいる方も多いのではないかと思います。私は家族を優先し決断しました。今では私の新しい家族である妻と子ども達に加え、両親と祖母も一緒に、生まれ育った故郷で生活しているので、本当に充実した日々を送っています。「大好きな栃木県」に貢献できる仕事を一緒にやりましょう。



休日は矢板市のマイホームで家族とのんびり過ごす



栃木で叶えた新聞記者の夢

—下野新聞社に就職する前、栃木県に縁やゆかりはありましたか？

全くありませんでした。生まれてから数年間、父親の実家の岩手県内で過ごしました。その後は埼玉県内で育ち、中学・高校は埼玉県内の学校に通いました。大学は東京都内の私立大に通っていました。

—下野新聞社の採用試験をどう知り、なぜ受験したのですか？

新聞記者になるのは、高校時代からの夢でした。大学時代の就職活動では複数の新聞社を受験し、下野新聞社も受けましたが採用には至りませんでした。一度は学習塾の会社に就職しましたが、諦めきれず社会人3年目の年に再度受験しました。下野新聞社の採用試験はホームページでチェックしていました。受験の際、他県出身によるハンディは感じませんでしたし、出身や経歴ではなく記者として働きたい思いを見て内定を出してくれたのだと、勝手に思っています。

—他県出身者として、実際に下野新聞社で働いてみてどうですか？

会社にも、地域にも、自分が他県出身者であることを忘れるほどなじめていると感じています。飲食店や行政などの取材先からは、集客やPR方法で意見やアイデアを求められることもあり「よそ者」の視点も役立ちます。日光市の下今市駅で長男が大好きな東武鉄道特急「リパティ」とバチリ



いつの間にか自分の居場所に

—下野新聞社に就職する前、栃木県に縁やゆかりはありましたか？

京都で生まれ育ち、大学時代は実家から大阪に通っていたので、栃木へ来たのは就職試験の時が初めてです。縁もゆかりもありませんでした。駅を出てすぐ目に付いた田川と宮の橋の景色になぜ

か懐かしさを感じ、「ここに住むのかぁ」と直感が働いた記憶があります。

—下野新聞社にIターン就職を考えている人にメッセージを

住み慣れた土地や家族、気心の知れた友人と離れ、新しい環境で何かを始めるには労力がかかりましたし、一歩踏み出すにも若干の勇気が必要でした。日々たくさんの刺激を受け、泣いて笑って生活が落ち着かなかったのですが、「住めば都」というように、いつの間にか自分の居場所が見つかり、自分を大切にしてくれる人、自分が大切にしたいと思う人に出会えました。案外、環境や生き方を変えるチャンスになかなか巡り合えないので、目の前にやってきたら、迷いながらも飛び込んでほしいです。



初任地の栃木支局で知り合った「とち介」と一緒に

新卒採用、29歳まで受験可能

下野新聞社の新卒採用は例年、22歳の大卒だけではなく、社会人も含めた29歳まで応募可能です。いわゆる「第二新卒」の方も歓迎しています。転職で入社した者の多くが新卒採用の枠で受験しています。また、採用の必要が発生した場合は、春に限らず秋にも新卒採用を実施したり、臨時に職種別で採用を実施することもあります。社員募集の際は、下野新聞本紙に告知記事を掲載します。

「社会人通年採用」登録受付中

即戦力となる人材の登録を通年で受け付ける「社会人通年採用」は、登録期間2年間で、ホームページの採用案内から登録を受け付けています。採用の必要が発生した場合に試験を随時行います。通算3年以上の社会人経験が必要で、原則、正社員で採用します。



下野新聞 SOON採用案内ページのU・Iターン特集では、インタビュー全文を掲載しています。QRコードからアクセスしてください。

HOW TO

下野新聞が できるまで



取材 執筆

下野新聞の記者は、宇都宮市の本社と栃木県内に17ある総支局に約80人。ニュースの現場を駆け回って取材した「ネタ」は、取材ノートや資料を見返しながらパソコンで執筆し、新聞記事にしていきます。書き上げた記事は、写真と合わせて記者のパソコンから本社のサーバに送信。本社にいる編集の責任者「デスク」が読んで記事を手直しするなどし、最終仕上げをします。



デジタル媒体

大きな事件・事故や県民にとって重要なニュースは、ホームページ「SOON」や電子版、速報メール、SNSなどを通じて、翌日の紙の新聞の発行を待たずに配信します。



デスク会議

「明日の1面、どの記事を使う？」一。下野新聞社の本社には、下野新聞記者が書いた記事だけではなく、共同通信社の全国・世界のニュースも大量に送られてきます。デスク会議は、そんな膨大な記事の中から、翌日の紙面に載せる記事を決める重要な会議です。各部門のデスクが熱い議論を戦わせ、記事を価値判断し、紙面構成を決めていきます。



整理

紙面構成が決まると、整理部で実際の紙面をつくります。読者の興味を引く見出しを付け、記事や写真とともにパソコン上でレイアウトします。現在進行形のニュースの場合は、紙面製作中にも記事が刻々と差し替わる中、印刷が始まる時間までに必ず紙面を完成させなければなりません。



印刷

下野新聞本社で組み上がった紙面データは、光回線で鹿沼市の下野新聞印刷センターに送られます。紙面データはアルミ板に直接焼き付けられ、輪転機にセットされます。輪転機が高速で回り始めると、すぐ隣の人の声が聞こえないくらい大きな回転音が響き、約28万部の新聞が2時間ほどで刷り上がります。



配達

県内に約140ある新聞販売店を通し、読者のもとへ届けられます。新聞休刊日以外、毎日深夜から朝にかけて、各販売店から約2,400人の配達員により、各家庭に配達されます。雨の日は1部ずつ丁寧にビニールなどで包み、雨に濡れないようにします。



発送

刷り上がった新聞は、75部ずつビニールで梱包され、トラックで県内各地の新聞販売店へと届けられます。



読者



会社概要

商号 株式会社 下野新聞社

本社 〒320-8686 栃木県宇都宮市昭和1丁目8番11号

創刊 1878年(明治11年)6月1日

資本金 4,800万円

代表者 代表取締役社長 若菜 英晴

事業内容 日刊新聞発行ほか

従業員数 314人(2022年4月現在)

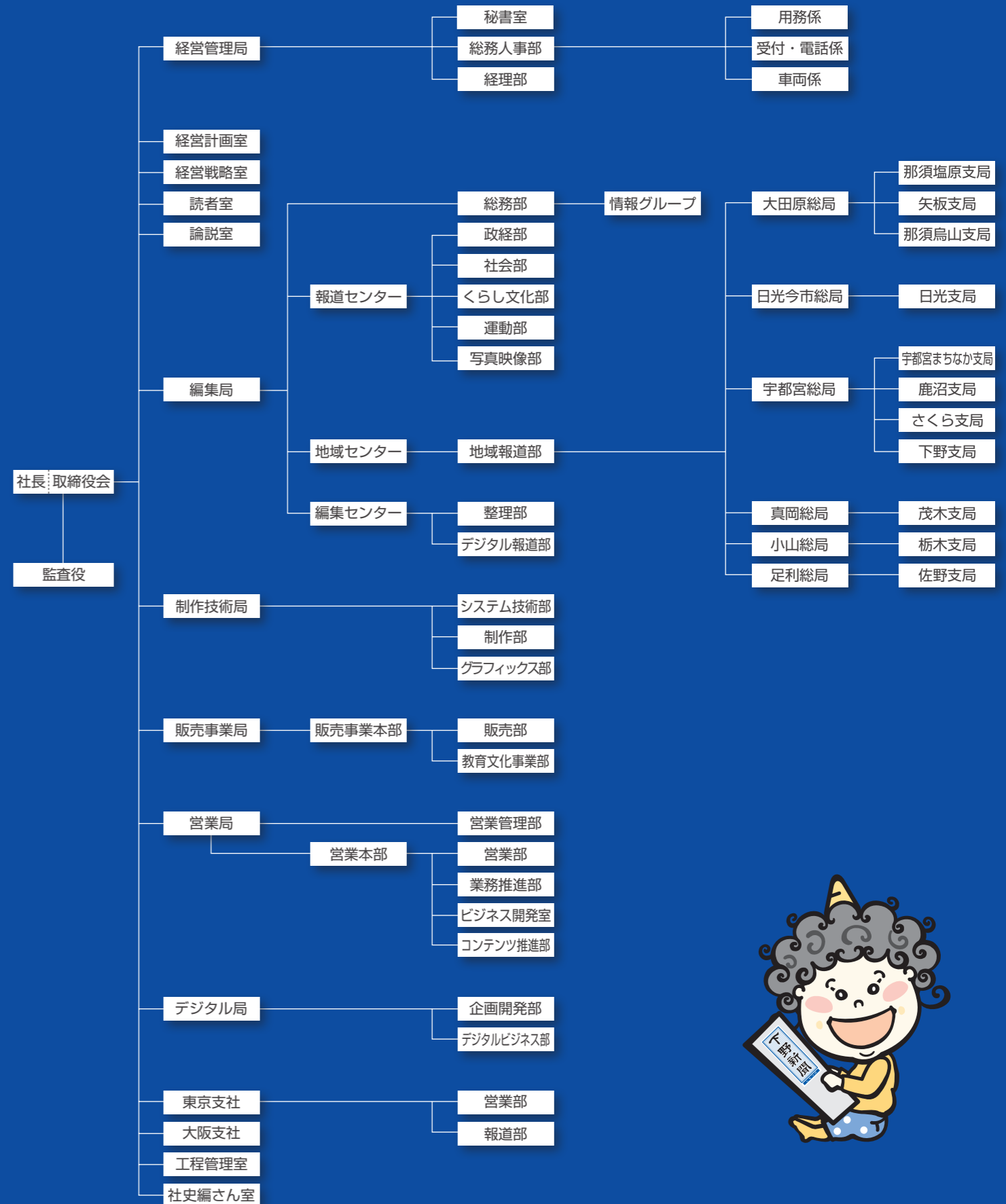
発行部数 28万316部(2021年4月:日本ABC協会調査)



本社・支社・総支局住所一覧

□本社	〒320-8686 栃木県宇都宮市昭和1-8-11	TEL028-625-1111(代)
□東京支社	〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル8階	TEL03-5501-0520
□大阪支社	〒530-0001 大阪市北区梅田3-4-5 毎日新聞ビル4階	TEL06-6346-8690
□大田原総局	〒324-0043 大田原市浅香1-5-7	TEL0287-20-1023
□那須塩原支局	〒329-3133 那須塩原市沓掛1-2-8 那須塩原サンライズスクエア101	TEL0287-67-1623
□矢板支局	〒329-2145 矢板市扇町1-13-7 シムシティ21-102B	TEL0287-40-1023
□那須烏山支局	〒321-0624 那須烏山市旭1-1591-12	TEL0287-80-1023
□日光今市総局	〒321-1272 日光市今市本町7-8	TEL0288-30-1023
□日光支局	〒321-1405 日光市石屋町6-5	TEL0288-50-1023
□宇都宮総局	〒320-8686 宇都宮市役所内記者クラブ	TEL028-632-2958
□宇都宮まちなか支局	〒320-0802 宇都宮市江野町8-12 下野新聞NEWS CAFE 3階	TEL028-908-1023
□鹿沼支局	〒322-0036 鹿沼市下田町2-1080-3	TEL0289-60-1023
□さくら支局	〒329-1323 さくら市卯の里4-55-4	TEL028-681-7023
□下野支局	〒329-0511 下野市文教1-20-17 秀和マンション102号室	TEL0285-51-1023
□真岡総局	〒321-4305 真岡市荒町5204-9	TEL0285-80-1023
□茂木支局	〒321-3531 茂木町茂木1590-8	TEL0285-64-1123
□小山総局	〒329-0201 小山市栗宮1-10-1	TEL0285-30-1123
□栃木支局	〒328-0015 栃木市万町7-5	TEL0282-20-1023
□足利総局	〒326-0051 足利市大橋町2-1821	TEL0284-40-1023
□佐野支局	〒327-0821 佐野市高萩町467-1	TEL0283-20-1123

組織図 (2022年4月現在)





下野新聞社